

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第24回)

ニューカッスルに石炭を運ぶ

東京でミュージカル『ビリー・エリオット』が上演されている。映画『リトル・ダンサー』の舞台版である。日本の子供たちの演技とダンスも見事だったが、12年前にロンドンで初演舞台を見たときの衝撃も忘れられない。日替わりで主演ビリーを演じた4人の少年俳優が、揃ってオリヴィエ賞主演男優賞を受賞して、史上初の4人同時受賞と話題になった。

物語の舞台となっているのは北イングランドの炭鉱町である。この地域独特の、特に炭鉱労働者たちの訛りをセリフだけでなく歌にまで出しているのが特徴的だった。ダーラムの炭鉱、という設定のようだが、作者リー・ホールは自らの出身地ニューカッスルをモデルに描いている。「ニューカッスルに石炭を運ぶ」＝「無駄なことをする」という慣用表現があるように、イングランドを代表する炭鉱町だ。正式には「ニューカッスル・アポン・タイン」(タイン川沿いのニューカッスル)といい、このタイン川沿いの地域一帯の方言／訛りを「ジョーディ」(Geordie)という。『ビリー・エリオット』の中で、炭鉱夫たちがストを行うために「団結だ、団結だ!」とジョーディで歌うのに被せて、バレエレッスンをする先生の「ワン、ツー、スリー…」という掛け声が入るのだが、それもジョーディで、「…シックス、セブン、イー

ト!」と、どう聞いても「エイト」とは聞こえないのが印象的だった。

ビリーの父親がロンドンに出てきたときにロンドンの人と会話が成り立たないのも訛りの強さを印象付けるワンシーンだ。同じリー・ホールの書いた『炭鉱の絵描きたち』という芝居では、さらに北へ行ったところの炭鉱町が舞台で、そこへニューカッスルからやってきた絵の先生が「都会の人」扱いされて「言葉が通じない」というのもまた印象的だった。

サッカー・プレミアリーグで活躍する「ニューカッスル・ユナイテッド」の選手たちの愛称は「マグパイ (magpie)」である。白と黒のパトカー(あるいはパンダ)のような色合いの鳥「カササギ」のことで、チームの正ユニホームが白と黒の縞であることからこう呼ばれるようになった。初めてロンドンで暮らしたときに、毎日当たり前のように(雀のように、あるいは、カラスのように)家の前に飛んでくるこの白黒の鳥が、自分にとっては珍しかったので、夢中になってカメラに収めたものだが、あるとき鳴き声を聞いて吃驚した。「◎×\$#△*!」予想外に強烈な音だったのだ。もしかしたら、ジョーディで鳴いていたのかもしれない。